



0 0 2

1 工程@1 円 ~

知的障害者の労働現場

利用者が仕事上の戦友

千葉 晃央 (京都国際社会福祉センター)

1 工程@1 円でいいのか？

そもそも、「1 工程@1 円」というタイトルについて、触れておきたい。「作業工賃の相場やし。」私が働き始めてすぐの頃、先輩に言われたことばだ。一般企業の感覚を持っている方にしたら、「安い！」と思われるだろう。これは、本当は、内職さんの価格相場である。当然、この状況には満足していない。怒りも込めてのタイトルだ。

先方の業者の方と話しをしていたら、「内職に仕事を依頼するか？」「刑務所に依頼するか？」「福祉の作業所に依頼するか？」どこにふっても、あんまり変わらないというのが企業の側の見解のようだ。そんな

中でも、それぞれの依頼先には特徴がある。

刑務作業は、昨今の刑期中の社会復帰、更生プログラムの時間の増加で、刑務作業時間が減っているようだ。前回、書いた日本国内の低賃金労働市場は福祉系、刑務系ともに規模が縮小、ということはつまり、ますます商品加工のコストがかかっているかもしれないのだ。さらに、大前提として、刑務所という枠組みの中での作業なので、時間、場所の拘束もあるだろう。

福祉での作業の特徴では、内職さんが好まない仕事があるのだ。つまり、企業にとっての福祉施設に出すメリットである。普通の自宅でしている内職作業では、大きなもの、そして大量のものや、かさばるもの(体

積が大きいものは、置く場所が限られる。油などで、手や屋内が汚れるものは敬遠される。重たいものは、内職作業の主戦力である女性には運べない、もしくは運べても体力への負担が大きい。そして、臭いがするものは、家が臭くなるので敬遠される。

この、大量で、大きくて、重くて、汚れる可能性があって、臭いがあるもの…。それらを、普通の内職さんの自宅での作業に比べると、福祉施設はある程度はクリアできるのでそんな仕事をさせていたideていることが多い。福祉施設にしたら、逆にそこが強みだ。油系のにおいがある、重いものとなると、ネジ、工業製品の金属製部品などが経験した作業だ。大きくて、臭いがあったというものでは、服飾系のタグ付け、畳み、包装作業だ。

福祉職が商談

これら、企業と福祉施設の状況を踏まえて、商談が行われる。とくに単価の交渉と、作業工程の量、納期とが要点になってくる。福祉施設も利用者の収入を守るため、企業も利益を守るための交渉だ。もちろん「真剣勝負」。時には、「足元を見る」、「足元を見られる」というような状況と思えるときもあるし、「関係性重視故の厳しい折衝や、逆に譲歩」というような状況もある。このあたりのやり取りが就労施設系の福祉職には求められる。

福祉職なので、多くのスタッフはそんな研修や経験は少なく、もちろん福祉領域でも学ぶ機会はない。どちらかというとうことが苦手で、福祉という職種を選んでいることが多い。他者との緊張場面が基本

的に苦手で、それ故企業との商談での交渉ができず、なおかつ、一般のモノづくり業界の相場を知らない。その結果、時には価格破壊?と思うような単価もある。福祉がしたかったなので、単価交渉とか、作業を円滑にまわすなんて、やりたくない。もしくは、私には高度過ぎてできないという新人もたまにいる。支援と作業の両立という就労施設系の職員の命題が、自分には重いというのだ。

なかなか辿り着けない定番商品

どのくらい仕事があるかも、重要になってくる。短期で終わるものを「スポット」といっている。逆に、長く続くものは「定番」といわれ、作業する側はとても歓迎する。スポットだとさまざまな作業に必要なもの、作業に使う機械、補助具などを準備しても、その仕事が終わると役目が思ってしまうからだ。定番だとこれからも続く。となると、時間も、お金もかけやすく、利用者も習熟するし、それを踏まえた支援の計画も立案できる。

とはいえ、定番商品の作業をするチャンスはなかなかない。企業が下請けに外注で出すという時点で、その一時を乗り切る手段であることも多い。なので、仕事も定番ではない。つまり定番作業はのどから手が出るほど欲しいものだ。

定番にも問題は付きまとう。日常的に定番商品の生産に入ると、その仕上がる量が課題となってくる。日産いくら、月産いくらというところだ。一つの施設でできる作業の量は、何千ぐらいまでなら、感覚的に大丈夫と感じるが「万」まで行くと、その作業日数に余裕があるかなど、慎重な判断が迫ら

れる。福祉施設というところの生産に関わる利用者の数と目標数がキャパを超えてくることがあるのだ。その時には、残業で対応する。職員だけの残業、利用者も交えた残業とやり方はさまざまだが、いまやっている仕事を大切にしている、社会に役に立ちたい、お金を稼ぎたいという一心だ。

1 作業につき、少人数作業

一方で、一つの作業を施設内の大多数がしていることはリスクマネジメントの観点から行くと、かなり危険だ。その仕事が無くなってしまうと全滅になる。明日から何する？となりかねない。作業は数種類あり、集中しすぎず、分散している状況を作るようにしている。その結果、多くて数十人の福祉施設が多いので、それを多種の仕事に分散させると、一つの仕事に従事できる人はさらに少なくなってくる。

一つの社会福祉法人で複数施設を持っているところでは施設間の協力態勢で大口の仕事ができるが、小規模の施設では難しい。小規模の作業所では作業室が、お昼には食堂になるということも多くそのハードの面で、すでに十分に作業収益が限られてしまう。つまり、就労系の福祉施設は内職さん以上の数ができて、一般の業者よりは数が少なめの仕事を請け負うことが多い。

仕事上の戦友

プロ野球チームの優勝セールは大変だった。ほぼ勝つだろうと仕事がスタートし、

数が半端じゃない。その会社のパートさんたちと福祉施設への外注とで必死にこなす。優勝決定前には、優勝セールになっても、残念セールになっても、店に並ぶ商品の加工の作業をするが、優勝した場合は決定後すぐ追加が入る。けど、負けると、入らないかもしれない。そんな流動的で、先のわからない状況にも遭遇する。追われている作業を必死にやりながら、日本シリーズの勝敗に一喜一憂した。注文があるから、うれしいような、大変のような...

そんな必死な作業をしていると、援助者と利用者は、援助関係でありながら、もう一方では、「戦友」のような関係性ができる。知的障害者の就労現場では、できる人が、できることをやるという感じで、日々の作業は回っていく。

加工作業の中心的なところは利用者が行い、相手との交渉、全体の進捗状況の把握など、コーディネートの部分、仕上げの検品などは職員がする。

女性の職員は、重い箱が持てないけど、利用者の男性は持つことができるので、その人が持つ。職員よりも、健常者よりも上手にはやく、作業をこなす方もたくさんいる。それを目の当たりにした実習生や見学者などは「障害者=被援助者」であるという単純すぎる構図を覆されるの常だ。ある場面では、どっちが健常者なのか？というところだ。健常と、障害と分ける2分法に疑問も感じていく。その現場の職員は、そのことを嫌というほど知っている。

このような、援助職と利用者の当事者のナラティブ(当事者の物語)は、今の福祉では、あまり扱われなくなってきた。福祉の現場で起こっている関係性のうち、援助者から被援助者の方向に向かう関係性だけ

を取り上げることは、ある一面しか見ていない。これは、本当によくない。福祉職は複眼的視点を持つ、多元的なとらえ方をすると散々、ソーシャルワーク論で自分たちがいっていながらである。自らが長年培ってきた利用者との関係性についてのメタなところでは、どうなっているのか？

長年、同じ仕事場で、同じ仕事を、汗を流し、涙を流し、共に取り組んできた利用者と援助職。この当事者たちのナラティブは共通の部分がたくさんあったのである。それが、自立支援法だなんだと、急に手のひらを返したように、援助職は操作をする側となり、ともに歩んできたことを忘れ、否定し、「これこそがプロだ」と言い始めたのが昨今だ。福祉職のおごりではないか？福祉職の支援が、医療などのように、それほど絶対的ではないという謙虚さ、自覚を忘れたくないと考えている。

福祉職の分野では、自己覚知が重要といわれる。自分の性格、傾向、価値観、そしてそれらの偏りを知り、それを踏まえて、支援をせよと。福祉のソーシャルワーク論こそ、今、自己覚知が必要ではないか？

家族より、施設職員の同僚よりも

夜寝ると夢の中でも利用者と一緒に作業をしている。実際、利用者にしても、福祉職にしても、それぞれ自分の家族よりも一緒にいる時間が長いこともある。そんな日々を15年も送っていると、利用者が仕事上の関係者である、被援助者である、利用者であるということは、最重要事項ではなくなってくる。同じ時代を生きて、同じ

所で汗をかいた関係性というものはゆるぎないものだ。

事実、私がこの業界で一番長く一緒に働いている人は、利用者の一人である。その人は駆け出しの大学生に毛が生えた程度の自分のことも知っていて、そのころもお世話になった。真夏の暑い日に山ほどのお中元の仕事を一緒に格闘した。そして、15年お互いに歳を重ねた今も、一緒にリサイクルの仕事で肩を並べて取り組んでいる。非常勤職員、契約職員が増えている流れ、そしてその一方で同じ施設に長くいるという状況がなかなか変わらない知的障害者領域の実態。

以上を考えると、今後さらに一番長く一緒に働いたのは利用者であるという経験をする福祉職は増えるだろう。そのとき、福祉職はその事実をどう自分たちでとらえ、位置付けて、歩いていくのだろうか？

